

関西学院大学文学部総合心理科学科

三浦ゼミ

2019 年度

卒業論文要旨



パチンコ・パチスロ依存と Highly Sensitive Person の関係

22013339 具足 和弥

本研究の目的は普段からパチンコ・スロットを含むギャンブルを行っている個人の方が普段からパチンコ・スロットを含まないギャンブルをしている個人よりも Highly Sensitive Person の傾向が強いかを検討することである。そのため、クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」登録者のうち、ギャンブルを常習的に行う人を対象にして質問に答えてもらい、普段からパチンコ・スロットを含むギャンブルを行っている「パチンコ・パチスロ群」と普段からパチンコ・スロットを含まないギャンブルをしている「非パチンコ・パチスロ群」を設定した。質問紙は日本語版 HSPS-J (高橋, 2016) 及び短縮版 SOGS-J (木戸・高橋・野田・嶋崎, 2019) から構成されていた。その後普段からパチンコ・スロットを含むギャンブルを行っている個人にインタビュー調査を行い、共通点を調べた。調査の結果仮説は支持されており、普段からパチンコ・スロットを含むギャンブルを行っている個人に共通点が見つかった。この調査結果を基に、先行研究を参考にして考えられる点、及び今後どのような研究を展開していくかについて考察した。

能力と価値共有が選択に与える影響

—人工知能と人間の比較—

22015363 藤本 健太郎

本研究の目的は、手がかりとしての能力と価値共有が意思決定に与える影響を調査することであった。実験1では、実験参加者はある6つの場面を想起した。その6つの場面とは、「なんらかの本を読みたい場面」「なんらかの映画を観たい場面」「なんらかの音楽を聴きたい場面」「難病を患った場面」「予定の時間にギリギリで移動にタクシーを用いる場面」「株式投資をする場面」であった。次に、実験参加者は各場面に関連した、実験参加者自身の価値観や嗜好について答えた。そして最後に各場面に精通する2人の人物を提示した。実験参加者は、その2人のうち、1人のみアドバイスや手助けを求めることができるという実験であった。実験2では、実験参加者を2つのグループに分けて、1つを実験1と同じ2人の人物、そしてもう1つのグループでは、2種類の人工知能のうちどちらかから、アドバイスや手助けを求めた。本研究の仮説は、「価値観の共有した人工知能よりも、能力の高い人工知能のほうが人間からの信頼が高い」であった。実験の結果、仮説は支持されなかった。つまり、人間は人間に対しても人工知能に対しても、信頼に対する寄与する要因は大きく変わらないのではないかと言える。

お菓子の共食が初対面の二者の課題遂行に与える影響

22016327 藤井 美晴

本研究は、Woolley & Fishbach (2019) の研究に基づいて、お菓子の共食によって初対面の二者でおこなう課題成績が良くなるかどうか、また、協力行動が増えるかどうか、相手に対してポジティブ感情が増加するかどうかを検討することを目的としておこなった。実験は初対面の二者間でおこない、1 つの容器に入ったお菓子を共食するシェア群とそれぞれの容器に入ったお菓子を食べる個別群を設定した。課題中は課題成績や協力度合いを記録し、課題前と課題後に現在の感情、課題後には課題や相手について主観的な評価をさせるアンケートをおこなった。実験の結果、課題成績と協力度合いについては、条件による統計的な有意差は見られなかったが、シェア群の方が個別群よりも課題成績が良く、協力度合いが高い傾向が見られた。また、シェア群の方が個別群よりもポジティブな感情が生起されていることが示された。ネガティブな感情と課題や相手についての主観的な評価にはお菓子の共食による影響は見られなかった。

歴史区分モデルの考案とその妥当性の検討

—令和改元前後のパネル調査による比較—

22016333 入枝 和韻

本研究では、地球環境・技術・儀礼的出来事の三つの基準によって歴史を区分するというモデルを考案し、それを基に、特に儀礼的出来事による区分に焦点をあて、区分を実証的に示すことを目的とした。具体的には、2019年5月に行われた平成から令和への改元を儀礼的出来事として捉え、その前後の4月・5月・10月にパネル調査を実施することで、参加者の回答傾向に差が生じるかについて検討した。

調査の結果、個人特性や調査時期による効果が一部で見られたが、支持されなかった仮説もいくつかあり、歴史区分が実証的に示されたとするには不十分なものであった。また本調査で用いられた一部の変数においては内的一貫性の値が低かったため、より参加者の性質を正確に捉えられる尺度の開発の必要性が見出された。本研究での調査時期では、人々の中で歴史区分が起きる期間として短かった可能性があるため、それらの検討のためにも、調査については本研究のみにとどまらず、今後も継続的に行うことの必要性が見出された。

有権者の政治関心と選挙運動接触が投票行動に与える影響

—枚方市議会議員選挙における事例研究—

22016340 檀野 汐里

本研究の目的は、2019年に行われた枚方市議会議員選挙において、候補者の選挙運動と有権者の政治関心が投票行動にどのような影響を与えるかを検討することである。データを収集するために、選挙運動期間中に候補者1名に密着し、選挙運動の観察を行った。また、投開票後に枚方市の有権者に対し、ウェブ調査を行った。ウェブ調査では、個人属性、選挙に関する内容、枚方市に対する期待や愛着を尋ねた。分析の結果、選挙運動の接触数の多さによって、投票先の好感度が高くなること、投票の有無に影響していること、政治関心が枚方市への愛着や市政への期待に影響していることがわかった。この結果から、選挙運動は選挙に当選する上で必要な行動であり、有権者を投票へ向かわせるのは政治関心や地域愛であることがわかった。また、観察から選挙運動を効率的に行うには、資金や人手の数が必要なことがわかった。そして、政党に所属している候補者の方が無所属の候補者よりも当選するのに有利であると考えられることから、選挙に当選するために必要であると言われている地盤・看板・鞆は実際に必要であるということがわかった。

現在の大学生の宗教観と幸福感の関連と宗教行動に対する理解の検定

22016348 中野 了由

本調査では質問紙に対して調査対象者が回答した正の感情、不安感情、人生に対する満足感、宗教観、宗教行動という回答項目についてそれぞれ因子分析を行い、正の感情は1因子、不安感情は3因子、宗教行動は3因子、宗教観と人生に対する満足感は分析が不適解となったので先行研究に倣って3因子、5因子というように下位因子を作成した。その後、宗教観についての男女別の関連と男女差について検討し、また宗教観について正の感情、不安感情、人生に対する満足感の間の男女別の関連を検討し、先行研究である谷(2007)の結果より関連や男女差が強くみられるかを検討した。宗教観と宗教行動との間の関連についても検討し、現代の大学生は宗教的でない行動を宗教的だと思っているかを検討した。その結果、宗教観についての関連と、宗教観とほかの因子についての関連は認められたが、宗教観についての男女差は認められず、どちらも谷(2007)より強い関連や男女差ではなかった。宗教行動についても宗教的でない行動を宗教的でないと考えているが、区別がついているのかが判別できなかった。以上のことから宗教は人生の目的や意味を考えさせるものとしての役割を持ち続けているが薄くなっているといえる。今後の課題として調査対象者の増員と宗教行動の質問項目の内容変更が必要であると考えられる。

「おたく」に対する偏見と犯罪イメージに関する世代間比較研究

22016349 池月 優輝

本研究は、学生やその保護者にとって「おたく」が容認される存在になっているかについて検討すること、加えて「おたく」が罪を犯すイメージを持たれているかを明らかにすることを目的とし、川島（2013）を参考にして調査を行った。本研究における仮説は、大学生の「おたく」容認傾向は高く、保護者の「おたく」容認傾向は低いと考えられる（仮説1）。大学生の「おたく」に対する犯罪イメージは低く、保護者の「おたく」に対する犯罪イメージは高い傾向が出ると考えられる（仮説2）の2つである。調査では、学生とその保護者を対象に、菊池（2000）の「おたく」に関する質問項目、対人認知評定のための項目、「おたく」容認度尺度、犯罪イメージ測定のための項目を使用し、質問を行った。得られたデータを分析した結果、大学生の「おたく」容認傾向は高く、保護者の「おたく」容認傾向は低い結果は得られ、仮説1は支持された。しかし、大学生の「おたく」に対する犯罪イメージは低く、保護者の「おたく」に対する犯罪イメージは高い結果は得られず、仮説2は支持されなかった。この結果を踏まえ、質問内容の問題点や今後の展開についての考察を行った。

現在の交際状況と結婚想定経験による恋愛類型意識の差異

22016438 清水 雅志

本研究では、天谷（2005）の研究に基づいて、現在の交際状況や結婚想定経験によって各恋愛類型意識にどのような差異をもたらすのかを検討することが目的であった。調査は大教室を使用し、集団で行い、対象者の現在の交際状況に応じた質問項目に5段階で回答させるものであった。交際状況によって対象者を「これまでに結婚を考えたことがある・ない・交際経験がない」の3条件、および「現在交際相手がいる・いない・交際経験がない」の3条件に分類して、分析した。また、性差についても合わせて分析した。結婚想定経験と現在の交際状況による恋愛類型意識の差を比較するため1要因分散分析を用いて検討したところ、ストーゲイ以外で主効果に有意な差が見られた。このことから、友情的な愛には、双方に与える影響がないことが示された。また、結婚を想定するでは、相手の利益を追求するアガペ得点や、独占欲の強いマニア得点が高いことが示された。性差については相手の利益だけを考えるアガペ得点が女性よりも男性のほうが高く、相手の地位などを重視するプラグマ得点は男性よりも女性が高い結果となった。天谷（2005）でもアガペ得点は女性よりも男性のほうが高く、プラグマ得点は男性よりも女性が高い結果となっていた。そのため、15年ほどたった今も結果は変わらなかったことが示された。

社会心理学における再現性の追究

—Hsee(1998)の Less-is-better effect を例に—

22016443 寺田 莉子

本実験は、Hsee(1998)の研究1を実験環境を増やして追試し、Less-is-better effect が再現されるかどうかについてと、実験環境における差異について調べた。Hsee(1998)は、海外の複数のラボの共同追試実験 Klein et al.(2018)でも追試されている。Hsee(1998)では大学内での授業中の環境(集合調査)で大学生を対象に実験が行われたが、Klein et al.(2018)ではインターネット環境で一般市民を対象に実験が行われていた。本実験は上述以外に実験室実験環境を加えた。実験は全ての実験環境において Klein et al.(2018)と同じ質問項目で、Qualtrics で回答させた。それぞれの実験環境で対応のない t 検定、3つの実験環境の差異を調べるためにランダム効果モデル(Random-effects model)によるメタ分析を行った。その結果、全ての実験環境において Less-is-better effect が確認できた。また、3つの実験環境に差異が無いことも分かった。そのため、Less-is-better effect は大抵の実験環境では再現されることが明らかになった。この結果を踏まえて、心理学の再現性について考察をした。

手書き文字は書き手の性格を表すのか？

——文字の丁寧さによる印象の差異と実際のパーソナリティとの比較——

22016456 藤井 ひまわり

本研究は、手書き文字が書き手の性格を表すのか、また字の丁寧さが読み手に与える印象に影響するのか否かを検討することを目的とした。そこで①筆跡から推測されるパーソナリティ特性は、書き手の実際のパーソナリティと必ずしも一致しない、②筆跡サンプルから推測されたパーソナリティおよび感性印象は「普通条件」、「丁寧条件」のいずれも推測者内で一致するという仮説を立て、パーソナリティは TIPI-J、感性印象は 12 対の形容詞対を用いて評価させ、普通に筆記させた文字と普通に筆記させた文字とを比較した。筆跡提供者から得た筆跡サンプルから推測・評定された結果について、パーソナリティにおいては実際のパーソナリティを検定値とする平均の推定を行い、感性印象においては普通条件と丁寧条件を対応のある t 検定を用い分析を行った。その結果、書き手の実際のパーソナリティと筆跡から推測されたパーソナリティは不一致であること、筆跡サンプルの印象は字の丁寧さの違いによって異なることが示された。考察においては、さらに TIPI-J と形容詞対の相関を見ることによって、筆跡の印象から推測されるパーソナリティの特徴が明らかになるのではないかと今後の展望を述べた。

物語完結後の創作における主人公の人称と結末の影響

22016457 多和田 穂乃

本研究では、個人の読書スタイルの違いや共感能力の高さ、物語本文の内容の違いが、どのように物語読了後のつづき物語の文章量に影響するのかを明らかにすることを目的として実験室実験を行った。仮説としては、共感能力が高くなるほど、文章量が増え、また、読書に親しみがあり、読書に必要な能力が高いほど文章量が増加すると仮定した。実験では、読書スタイルに関する質問項目と LRQ-J の質問項目に回答させた後、RMET 課題を行ってもらった。その後、ランダムに割り当てた物語（ハッピーエンド×私主人公条件、ハッピーエンド×他者主人公条件、バッドエンド×私主人公条件、バッドエンド×他者主人公条件の 4 条件のうち 1 条件）を読ませ、読了後に LRQ-J の質問項目のつづきを回答させた。そして物語のつづきを自由に想像させ、作話させた。作話した文章量を対数変換したものを従属変数とする重回帰分析を行ったところ、エンドと人称表現の交互作用が有意であった。バッドエンド条件の場合は、文章量対数変換値が私主人公のほうが高くなり、ハッピーエンド条件の場合は、他者主人公の方が、文章量対数変換値が有意に高かった。これらの結果から、人称表現の差異がみられなかった原因として、読ませた物語の人称表現のうち、「あなた」が普段読み慣れないものであった可能性が考えられた。また、実験参加者とパーソナリティ特性が類似した主人公を選ぶ操作の必要性が考えられた。

敬語の誤用が対人印象に与える影響

22016480 鐘 雪丹

本研究は Boland, & Queen (2016)の研究を参考に、誤用による対人印象へのネガティブな影響が日本語においても見られるかどうかを探究した。さらに、誤用の量との関係も検討した。仮説として、(1) 発話に誤用がない場合よりも誤用がある場合の方がネガティブな印象につながる、(2) 誤用がある場合、多ければ多いほど対人印象がネガティブになる、の2つを設定した。実験では、SNSの擬似画面で誤用が仕込まれた会話を呈示し、特性形容詞尺度（林,1978）の2次元（個人の親しみやすさ、社会的望ましさ）とオリジナル項目の3つで計13項目7件法の対人印象評価を行なった。誤用の量によって、無誤用群、低誤用群、中誤用群、高誤用群の4群に分け、ランダムな順序で呈示し、参加者内要因で実施した。結果では仮説(1)は支持されたが、仮説(2)は部分的にしか支持されなかった。また「個人の親しみやすさ」と「社会的望ましさ」の間に差がみられ、「個人の親しみやすさ」評価は誤用の有無のみと関係が見られたが、「社会的望ましさ」評価は誤用の量によって印象評価がネガティブにつながることを示された。またオリジナル項目の分析結果より、誤用の量の増加によってユーモアがるという印象につながることも示唆された。

クチコミによる集団圧力状況で自己関与度が態度変容に及ぼす影響

22016481 易 同生

本研究はネット上での「買いもの」行為に注目し調査を行った。その中でも、買うかどうかを決める際に影響を与える要素として、クチコミというネットショッピングならではのものに焦点をあて、商品に対する自己との関与度と合わせて検討した。低関与度群、高関与度群と統制群の3群に分けて状況と商品の説明文およびクチコミを呈示する、1要因3水準のアンケート調査を実施した。呈示するクチコミに関しては、予備調査をして論拠がもっとも強いものを選別して本調査で用いた。本調査の結果、低関与度群と統制群はクチコミが唱導している方向と同じ方向へ態度を変容させた一方、高関与度群はクチコミに影響されずに当初の選択を貫くことが確認できた。すなわち、集団圧力のもとでも、商品に対する自己の関与度が高い人は周りから影響が小さく、一度決めたものを貫く傾向があると考えられる。

「オタク」に対するイメージの日中比較

22016482 張 馨蕊

本研究の目的は、日本人と中国人を対象として、オタクに関する意識調査を行い、回答者のオタク度、回答者自身のオタクに対するイメージ、および回答者の視点からの「周りの人々のオタクに対するイメージ」を問い、そのイメージを比較することであった。逆翻訳法を用いて、質問紙を日本語版と中国版両方作成し、Qualtrics を用いて Web 上でアンケート調査を実施した。分析の結果、オタク一般に対するイメージは、中国より日本の方がネガティブだということが明らかになり、仮説が支持された。日本の場合、回答者自身のオタク度の高さと、自己イメージのうちの違和感イメージのみに影響することが明らかになった。中国の場合、回答者自身のオタク度の高さと、自己イメージに影響することが明らかになった。回答者自身のオタク度の高さとオタク一般に対するイメージと関連せず、仮説の一部が支持された。日本人では、オタクに対する自己イメージより、一般イメージのほうがネガティブであることが明らかになり、仮説が支持された。